

惣国惣衆と中世社会

——紀州惣国一揆の中人制——

A Study of Peacekeeping Force in Medieval Republic kishū : Sōkoku Atsukai-shū

海 津 一 朗

Ichiro KAIZU

(和歌山大学教育学部社会科専修・歴史学教室)

2019年10月11日受理

要約

1980年代の中世社会史研究が、「近所の儀」「方角衆」など扱い衆による境界領域の裁定をめぐる自力救済慣行の発見に始まることは周知であろう(藤木久志・勝俣鎮夫の研究)。この組織と規範は中人制と概念化されるが、その扱い行為は「異見」「助言」など口入によって仲裁を行う「平和団体」と考えられてきた。このような中人制イメージは、自力救済社会の実像を忘れた現代人の偏見に由来する。ここでは、中世最後の一揆権力といわれる紀州惣国に取材して、地域紛争を解決する中人「惣衆」の組織と活動を明らかにする。それによって、日本中世社会の本質の一端に迫りうると考える。近郷合力の暴力連鎖が支配している過酷な地域社会に対して、惣国「惣衆」はいかに対処したのか。英訳を“共和国の平和維持軍”としたように、その結論はあまりにも意外なものである。

はじめに

藤木久志氏の豊臣平和令研究によって、中世～近世の研究状況は劇的に変化した。地域民衆(自力の村)の視座から一揆や大名権力を捉え直す枠組みは、中世百姓(敗北史観)や近世権力(専制)をめぐる通念を粉砕した^①。1980年代以後の日本中世史をリードした社会史研究とは、藤木氏の一揆研究(を起点とする研究潮流)にほかならない。それだけに、晩年の藤木氏が、このような中世民衆の自力救済慣行を、その過酷な生活環境＝自然災害、戦争暴力(とくに女子どもに對する)に収斂させて論じたことに疑問を禁じえなかった^②。なるほど外的暴力の深刻さは、中世と近世の社会の質的な差異を浮き彫りにできる手ごろな説明だったかもしれない。けれど、「生命維持装置」とまでいった村(共同体)の変質過程について、外的な契機の強調では済まされない。「すべての村が自力の村というわけではない」というレベルの短絡的な批判が散見するのも、これと関係しているように思う。

このような藤木氏の研究の原点が、「近所の儀」「方角衆」など扱い衆による境界領域の裁定の発見にあったのは論を待たない^③。自力救済の社会を秩序付けている地域の組織と規範が、中人制と概念化されて定着する^④。中人がどのような調停行為をしているのか、藤木氏の研究グループにより「境論の作法(規範)」として具象が集積され分析された(とくに小林一岳氏が中世山論データベースを構築して類型化したのが参考に

なる)^⑤。「異見」「助言」など口入によって仲裁を行う専門集団の事例。「平和団体」として近郷合力の暴力の連鎖を道理・神意によりさばく、というイメージが強いのではなかろうか。

ここでは、和歌山平野の紀州惣国一揆支配地域(雑賀衆・根来寺衆など)にみられる扱い衆(史料上「惣衆」)を取り上げたい。雑賀や根来は、中世の最末期まで統一権力と交戦した惣国一揆であり、鉄砲による武装独立した自力救済の「共和国」(ルイス・フロイス)であった。中世権力・社会の到達点を示すものとして、その地域支配については特別の関心が寄せられるだろう。「平和団体」としての惣国惣衆の実態をみることで、藤木久志氏が、そして社会史研究が追究した中世社会の達成に迫りたい。

1 惣国惣衆

惣国雑賀・根来の扱い衆の存在を示すのは次の史料である。原文書には欠損があり、同家所蔵の写本で補った(下線部の部分、斜体字欠損)。

【史料1】岩橋莊神主等連署起請文案

○和佐家文書^⑥

和佐・岩橋論所芝之儀、為泉識坊并惣国被仰、無殘悉彼芝渡置候、永代可_有御知行者也、仍而後日証文状、如件、

弘治三<丁巳>年四月十九日

岩橋莊

神主(略押)

源大夫(略押)

助(略押)

平内大夫(略押)

四郎大夫(略押)

若大夫(略押)

(追筆)

「神宮□(略押)」

六郎三郎(略押)

源三大夫(略押)

権守(略押)

三上郷神主」

孫五郎(略押)

和佐莊

参

雑賀莊噺衆人数

湊藤内大夫(略押) 雑賀助大夫(略押)

岡監物大夫(略押) 湊惣大夫(略押)

中嶋源左衛門大夫(略押) 六日市五郎右衛門尉(略押)

この史料を初めて学術誌上にて紹介したのは小山靖憲氏である^⑦。紀州惣国をめぐる石田晴男氏の発見と提起(紀北・紀中連合一揆)に対して^⑧、惣国理解の反証をするための切り札とした挙証史料であった(雑賀説、現在通説)。惣国の版域は重要な問題には違いないが、それ以上に守護権力を欠いた紀伊国北部の地において紛争解決の具体像がわかるという稀有の史料である。いまさういうまでもなく、大名や領主支配と地域の接点を中人制にもとめたのは勝俣鎮夫氏・藤木久志氏の80年代以後の研究であった^⑨。惣国を名のる広域一揆権力が、噺衆をもって領土内外の紛争に対処したことはきわめて重大なはずだ。にもかかわらず、この点を追求したのは、川端泰幸氏^⑩・小橋勇介氏^⑪ら荘園村落研究者のみである。紀州惣国研究の関心は著しく権力論・体制論に傾いている。

文書の内容は、紀ノ川の中州島にできた開発可能耕地「芝」をめぐる隣荘間の私合戦の裁定である(おそらく明応大地震による紀ノ川河口付け替えにともなう河道変更^⑫)。粉河寺領栗栖荘・熊野社領岩橋荘・歎喜寺領和佐荘3荘は、荘園領主を異にしつつ雑賀五組「中郷」組に属した。日前宮の宮井用水をめぐる中世を通じて一揆・私合戦の境論をくりかえしていた。芝相論(後掲史料2で「荒野出入」)はこの弘治3年(1588)の事件のみである。論所芝(紛争発生源)は両荘の北部に近接する河川敷と推定できよう^⑬。史料1はその決着を示した文書である。根来泉識坊と惣国の扱いにより岩橋荘側から和佐荘側に「残るなく悉く彼の芝を渡し置き」、和佐荘が「永代御知行あるべし」と定めた。岩橋荘が和佐荘にあてて論所の芝の去渡し(放棄)を宣言した「後日証文状」、証状になる。岩橋荘側の完全屈服であるから双方の契約・和与ではなく、請文であり起請文(誓約書)である。このような一方的な幕

引きを進めた根来と惣国の扱いに注目しよう。

岩橋荘として連署する神主から孫五郎までの9名は岩橋荘の指導層にちがいない。神主は荘鎮守高橋神社の神主、源大夫は永禄5年(1562)の湯川直春起請文案^⑭に岩橋の代表として現れる人物、平内大夫はこの合戦において奮戦死亡した平内次郎(後述)の縁者と思われる。「雑賀莊噺衆人数」は湊・雑賀・岡・中嶋・六日市の連署者6名(湊2名)であり、雑賀五組の「雑賀」組に属す(地図参照、湊藤内大夫、六日市左衛門大夫は永禄5年時の湊、市場の代表役)。追筆の3名については、神宮郷、三上荘がそれぞれ雑賀五組の「社家郷」「南郷」組に属するため、雑賀莊連署衆6名とともに「惣国噺衆」という意見がある^⑮。従いたい。

雑賀五組は領土内の紛争に「惣国」として介入して上位権力を排除して実質的に最終裁定を下した。当事者・論所の関係から雑賀組を中心に3組の9名が編成されたように、「惣国噺衆」は事件の内容によって成員が変動した^⑯。いまひとつの裁定主体、泉識坊の「噺」について、史料1の署判からうかがうことができない。泉識坊は根来寺行人方の有力子院であり、杉ノ坊・岩室坊らとともに根来寺権力の運営中枢を担っていた。「十ヶ郷」組の栗村(土橋)を本拠とする雑賀衆・土橋一党の建立した坊院である^⑰。したがって雑賀地域とのかかわりは深く、何らかの形で扱いに関わったと思われるが、史料1からはこれ以上はわからない^⑱。

だが、根来寺泉識坊の関わり、さらには史料1の地域紛争噺の実相までが、次の史料2によって明らかになる。愛の口入と記された惣国雑賀・根来の^{あつか}噺いとはいかなるものだったか。

2 荒野の出入と鉄砲合戦

岩橋荘を屈服させた噺衆の実態を明らかにしたのが次の文書であった。

【史料2】『佐武伊賀働書』(第5 和佐・岩橋荒地出入)

一 和佐・岩橋荒地之出入ニテ、ステニ合戦ニ及候、中ノ島東之河原ニテ道具揃フ仕候、平次方ノ者トモコトゴトク罷出候、我等土橋へ参候処、平次被申候ハ、我等ハ道具ソロヘニ参候間、内々留守ノ儀、孫一ヲデニテ候宗忠、真鍋藏介、我等之兄源大夫、我等、右之四人へ預ケ申由、被申候間、請取留守ヲ仕候、

(中略A)

中ノ島ノ西ノ口へ参候へハ、宇治ノ市場衆モ参ラレ候、我等堀ヘトビ込、大脇指ニテ屋ヲ切アケ上ヘアガリ候処へ、土橋太郎左衛門、根来衆ヲ七・八十人ツレ候テ我等跡ニ被参候、我等中ノ島ノ生ニテ候間、敵方ヘチカキ所へ参候へハ、三辻御座候間、

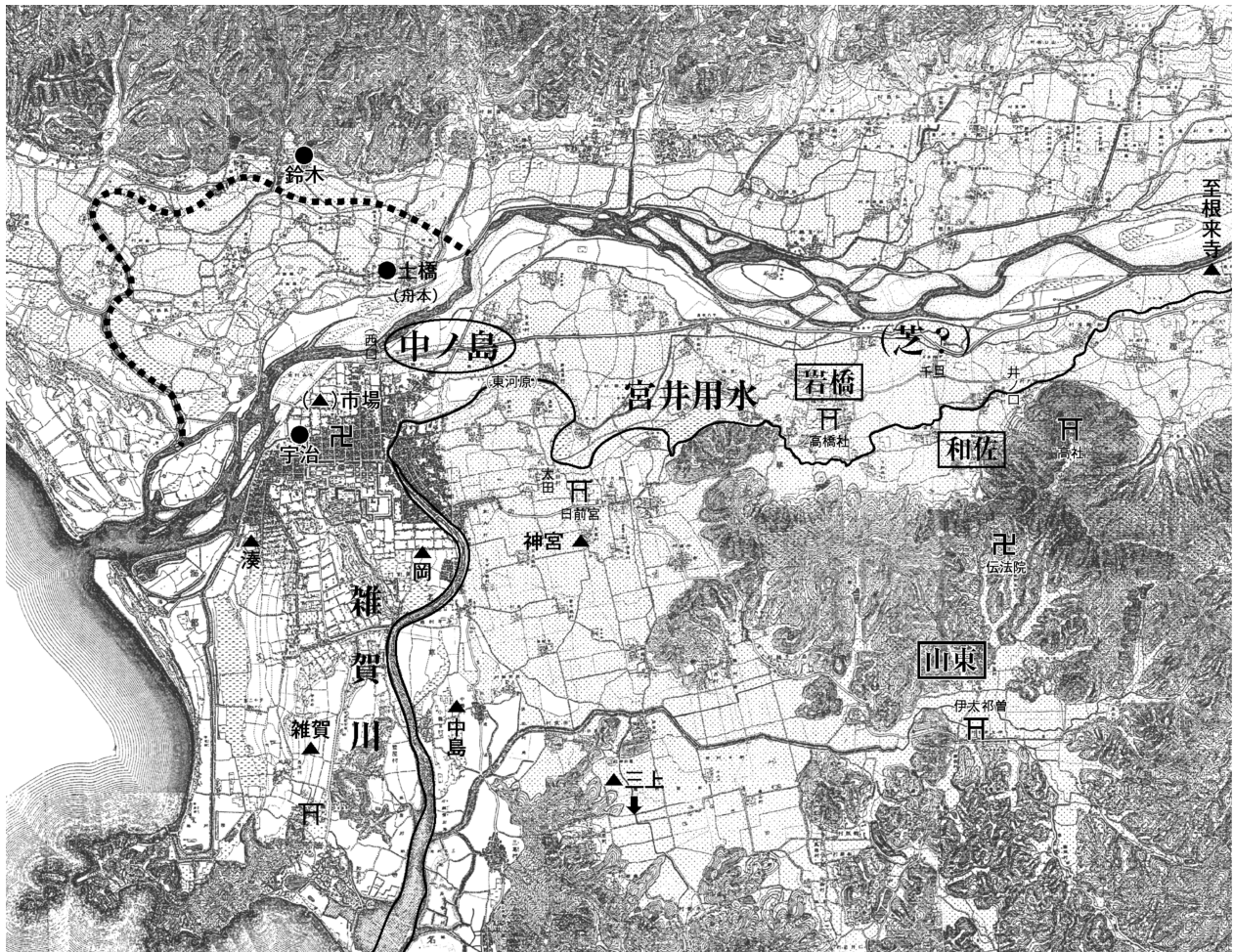
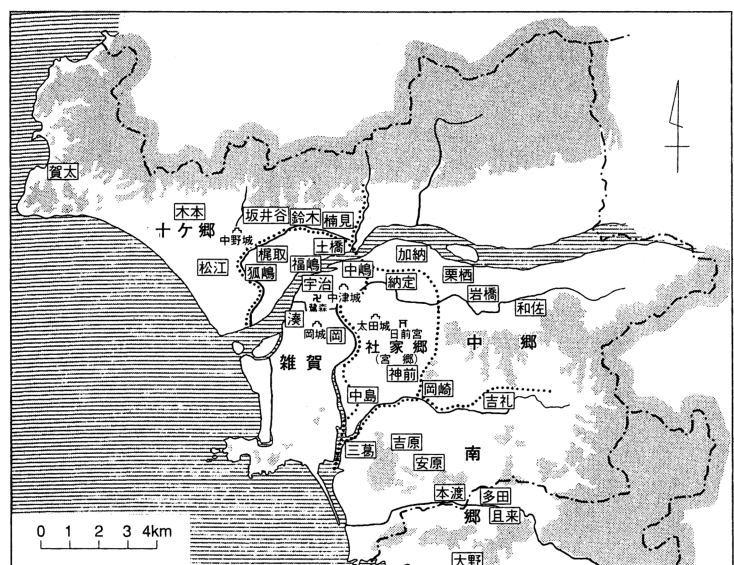
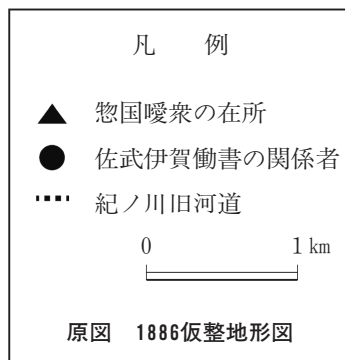


図 弘治・芝荒野相論関係図



参考 雑賀惣国五組の概念図（海津編『中世終焉』所収図より引用）

ソコ方陣取、鉄砲カマエヲ仕候、我等居所ト間十七八間程ナラテハ無之候間、我等鉄砲ニテ一番ニ平内次郎ト申モノムナイタヲウチヌキ、其外喜四郎、藤五太夫、孫六レキレキ五・六人鉄砲ニテ打ハタシ候、

(中略B)

其朝ノ道具ソロヘへ被参候処へ中ノシマノ敵方シカケ、散々ニタカヒ孫一者四・五人打トラレ申候、孫一手知ノ事ハ無比類ハタラキ申候、乍去後ノ度ハ我等懸合セ候ハスハ孫一面目ヲウシナヒ可申候^⑧

雑賀衆佐武伊賀守の軍功を江戸初期になって書き添えた働ききの一項目(第5)である。二次史料であるため潤色のある戦場場面を省略しているが(中略A・B)、それでも雑賀孫一、土橋平次・太郎左衛門、佐竹伊賀、真鍋蔵介ら著名な地侍が、勇躍して地域紛争を「解決」していく臨場感あふれた軍記であることが読みとれよう^⑨。戦場に勝利した佐竹伊賀側には痛快この上ない書きぶりである。第2段落には、佐武も加わった中ノ島西口の合戦譚が生々しく描かれている。地の利のある中ノ島で、敵が鉄砲構えを仕立てた三辻(現在の中ノ島ロータリーから地藏辻か)に17・18間の射程から射撃して平内次郎・喜四郎・藤五太夫・孫六ら敵方の歴々を撃ち抜き、敵は鉄砲構えを放棄して道場まで撤退したという(中略Bには鉄砲時代に特有の戦功確認の作法が記述されており興味深い、佐武の戦功をフレームアップするこの史料特有のデフォルメがある)。中世の自力救済の世界に生きる群像の感性をうかがわせるものにちがいない。

この事件を史料1と同一事件であると指摘したのは武内雅人氏である。『佐武伊賀働きき』を網羅的に分析して根来寺内における私合戦を解明した武内氏は、史料2の配列が弘治3年(1557)で自然であるとした(第4が1556、第6が1560)。史料1に見えなかった泉識坊の「噺」が、根来衆土橋一党の奮戦(佐武伊賀もその与力)として活写されていることを指摘した^⑩。戦場である中ノ島は、論所の可能性も保留するが「雑賀惣国内の内紛に拡大した結果、戦場場所が決まった」としている。近年、和佐荘地域の史料を包括的に検討した小橋勇介氏も、史料1・史料2を同一事件と捉えて分析した。論所が中ノ島になったのは近郷合力による紛争の拡大によるものとし、史料2の実態をうけて、史料1の噺衆が発向したとしている。武内氏、小橋氏の解釈(史料2から史料1への移行)は一見すると破綻の無い理解であり、紛争解決の手続きを「同量補償→近郷合力(私合戦)→中人制(扱い)→訴訟」とした先行研究にも合致している。二次史料を用いた立論に禁欲的であるべきという基本姿勢も大切であろう。

しかし、この理解は中世自力救済社会の実態を捉えていない。

3 惣国噺衆再考 ―愛の口入の正体―

それでは史料1「論所の芝の噺衆調停」、史料2「荒野出入の合戦」の関係はいかなるものか。それは全く同じ実態を示すもの、すなわち事件を解決させた「平和団体」の扱いを描いたものと思われるのである。

第1点。合戦の場である中ノ島は東河原に道具揃え(武器庫)して土橋平次ら泉識坊派の主力が総出で布陣し、留守になった本拠に佐武ら若衆が番をしている。勝敗をきめた中ノ島西口合戦は、敵方の堀切や鉄砲構えなど城塞化がうかがわれる。また朝の道具揃えに鈴木孫一に対する中ノ島敵方の襲撃があった、と。このような記述から推して、和佐・岩橋荒地の出入りは、中ノ島一帯を合戦の場に定め、朝からの仕掛けなど、一定のルール(時間・空間・規模)のもとに実施された「ゲーム」であった。地図にみるように中ノ島は論所芝・荒野ではありえない。和佐・岩橋の両当事者は、指定された決戦場「リング」に招かれて(東側和佐、西側岩橋か)、合戦「ゲーム」により白黒を決めた。史料2で西口鉄砲合戦で先陣にでた敵方平内次郎は、史料1の岩橋荘指導者・平内大夫の縁者と見るのが自然だろう(史料2中略Bで平内次郎は首狩りされたのが確認できるので史料1の岩橋荘連署衆に居ない)。

第2点。史料には、西口の敵方(岩橋荘)を圧倒する、和佐側に合力参戦するもの、①土橋平次・太郎左衛門ら土橋党(佐武伊賀・源大夫・真鍋蔵介も与力衆)、②根来衆70-80騎、③宇治市場衆、④鈴木孫一・宗忠が描かれる。記載は佐武の視点であるから、泉識坊勢力である①と②が中心であり、同じ味方でも③④は出し抜くライバルとして描かれる。この人々は、雑賀・根来の指導層・枢要の者たちであり、史料1で噺衆といわれた人々に一致する。署判に現れなかった泉識坊勢力とは、②の根来衆の大軍で、この紛争解決に主導的な役割を演じたのである(佐武活躍の誇張は前提)。②が土橋太郎左衛門の引率によると記されている通り、泉識坊の介入は、「雑賀」組栗村の土橋党(泉識坊の住坊)との関係だったことも明らかになる。佐武ら土橋党自体は雑賀荘に属しており、惣国「噺い仰せ」主力の雑賀荘噺衆を差配したと思われる。③市場衆は、史料1の噺衆人数に名を連ねている村である(④鈴木孫一は十ヶ郷組平井)。

第3点。先行研究では、史料2を近郷合力の拡大(ないし誇張)と見たが、鈴木、土橋、泉識坊など惣国一揆の中枢の関わる出入りである。統一権力でも容易に倒せなかった根来・雑賀の枢要を「調停」できる地域権力はどこにも存在しないであろう。根来・雑賀の扱いは、噺衆が(惣国のルールのもとに)こぞって一方を軍事的に征圧することで解決するというものだった。その際、「道具揃え」で集積した中には鉄砲が含まれ、史料2によれば実際に使用した掃討戦が実施されてい

る^②。

以上、史料1・2を合わせ用いることで、雑賀・根来の紛争地域に対する扱いを検証した。「愛の口入」という響を持つ扱いとは、戦闘の場を中ノ島に決めて双方当事者（和佐・岩橋）を招きよせて決着させる、その際、惣衆である泉識坊・惣国ともに決戦に合力する。結果的にすべての惣衆が和佐側に鼻息して、岩橋方の鎮圧に回った。鈴木孫一、土橋平次・太郎左衛門ら惣国の指導者層が自ら軍勢を率いて参戦し、鉄砲使用も含めた徹底的な組織的殲滅戦争を行なった。これが、史料から明らかになる紀州の惣国一揆支配地域における惣衆の口入だった。その姿は、あえていうなら、正義の名のもとに反米勢力を軍事制圧する国連の平和維持軍に比せられるだろう。

おわりに 一紀州惣国の中人制一

16世紀後半における紀ノ川河道変更にもなう荒野相論・地域紛争を素材にして、根来・雑賀惣国など惣国一揆の惣衆の地域紛争対応をみてきた。「異見」「助言」により口入で調停を行う中人制イメージとは程遠い現実、惣衆がこぞって武力制圧して解決するのが惣国一揆の調停であった。もちろんそこには、特定の時空に決戦の場を設定するなど、暴力拡大の連鎖を抑止する一定のルール（土儀）が作られた。双方当事者は、自力で味方を招きよせて、惣衆の合意（与力参戦）を促す策をめぐらす必要があった。執行（武力行使）に際して惣国一揆のサイドが、村々（惣衆）に対して軍事物資や人力面で補償をした形跡はみられない。極めて過酷な紛争解決の手続き。以上が紀州の惣国一揆支配地域における中人裁定であった。

藤木氏が一貫して追い続けたに日本中世民衆像^③。本稿は地侍による武装自治が継続し、原刀符令が発せられた最後の惣国一揆・紀州惣国、その中人制の在り方を通じて自力救済社会の現実に向かうとした。明応大地震により紀ノ川の河口が変わるという「和歌山平野」成立に起因する様々な地形変動・大災害や、最後の惣国一揆をめぐる諸権力の政治闘争^④や倭寇勢力による大量鉄砲伝来。もとより、惣国惣衆の過酷な処置には、このような対外的な要因を重視する必要があるだろう。だがあえていえばそれは副次的要因にすぎず、紀州惣国の「内輪散々ニ成テ自滅」（1585年4月22日太田落城・原刀符令発布）^⑤は中世自力救済社会の本質にもとづく、必然的な帰結であったと考える。

挙証史料2は、このような惣国を生きた中世人の感性に迫りうるものと考えますが、二次史料の扱い、私の史料批判の非力のため言及できなかった。

註

- ①藤木久志『豊臣平和令と戦国社会』東京大学出版会、1985、同『戦国の作法 村の紛争解決』平凡社、初1987、同『村と領主の戦国世界』東京大学出版会、1997。
民衆の一揆とはすなわち隣村同士の境相論（生存を賭けた村の合戦・ナワバリ争い）である、というのが藤木氏の民衆理解の根源である。そして、境界の領有をめぐる自力救済のさまざまな作法（規範）が発見されていった。自力の暴力を秩序立てていくシステムの研究がすすめられるが（徳政研究もそのひとつであったはず）、ある段階から外的暴力（自然・戦争）に舵が切られてしまう。この点は、戦後歴史学に対する回帰に由来すると思われるのだが後考を俟たい。藤木氏の（事実上）最後の仕事は、矢野荘の農民闘争論を完全否定するというものであった。権力に対する一揆ではなく、ナワバリ争いの暴力としての一揆を重視した、という点で首尾一貫したことになるだろう。
- ②このような傾向は、初発の段階からみられるが（註1 藤木1985のP136-137）、藤木久志「ある荘園の損免と災害—東寺領播磨国矢野荘のばあい—」（蔵持重裕編『中世の紛争と地域社会』岩田書院、2009）でピークとなった。海津「矢野荘十三日講事件再論—揆張本を売り渡した人々—」（『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』62で批判したがその後、田村憲夫氏により批判された（悪党研究会編『中世荘園の基層』2009）。生前の藤木氏は、膨大な災害史料を集めた鬼気迫る仕事により、「これだけの事実を前に反論できるか」と問い、学界を沈黙させた（藤木編『日本中世気象災害史年表稿』高志書院、2007）。
- ③藤木久志『戦国社会史論』東京大学出版会、1974、「II 戦国法の成立と構造」所収論文（初出1969）。
- ④勝俣鎮夫『戦国法』『戦国法成立史論』東京大学出版会、1979初1976
- ⑤小林一岳編『日本中世の山野紛争と秩序』同成社、2017
- ⑥文書名については川端泰幸氏の理解に従った。川端「紀州惣国の形成と展開」『日本中世の地域社会と一揆』法蔵館、2008、初2001。海津は原本確認ができておらず、後述の先行研究に多くを負っている。
- ⑦小山靖憲「雑賀衆と根来衆—紀州「惣国一揆」説の再検討—」（同『中世寺社と荘園制』塙書房、1998、初1983）。以後の研究はこの見解を踏襲して、『和歌山市史』1通史編に至る。補注参照
- ⑧石田晴男「守護畠山氏と紀州「惣国一揆」—一向一揆と他勢力の連合について」『本願寺・一向一揆の研究 戦国大名論集13』吉川弘文館、1984初1977、同「『紀州惣国』再考」新行紀一編『戦国期の真宗と一向一揆』吉川弘文館、2010
- ⑨註3 藤木論文・註4 勝俣論文
- ⑩川端泰幸『日本中世の地域社会と一揆』法蔵館、2008、同「中世後期における地域社会の結合」『歴史学研究』989、2019
- ⑪小橋勇介「紀伊国和佐荘の中世と近世」『和歌山市立博物館研究紀要』28、2013、同「戦国期和歌山平野における荘園の様相」『和歌山地方史研究』72、2017 川端泰幸氏は「「惣国」が紛争解決に中人的役割を担っていた」（註⑩書 p109-111）、小橋勇介氏は「紀州における「惣国」はやはり、紛争調停の主体として位置付けるべきと考え」（註⑩2017 p67）と的確にできたが、惣国の中人裁定方法については言及がない。
- ⑫海津「紀ノ川流域荘園再考」（同編『紀伊国かせ田荘』同成社、2011）において、芝・島など紀ノ川筋地目をめぐる自力救済と紀ノ川河道変更が紀州惣国にもたらした破局的影響を論じた。
- ⑬複雑に入り組む岩橋荘・和佐荘の地籍図を集成・トレースし

て、ツツミノソト(和佐中)、ウリハタ(禰宜)、オオヅツミネ(井ノ口)一帯を芝地に比定した大江佑子氏に従いたい(大江佑子『中世の接待所—地籍図からの考察』和歌山大学教育学部50期卒業論文 2002)。

なおその後、岩橋荘故地については、2003年新道(県道井ノ口秋月線)の建設に際して、岩橋氏居館想定地域を中心にして和歌山大学海洋研究室と和歌山県文化財センターとが連携して荘園遺跡調査を実施した(野田阿紀子「岩橋荘・和佐荘の用水相論」、海津「図8 岩橋水利灌溉概況図」、丹野拓「岩橋高柳遺跡(湯橋氏屋敷・居館跡)の発掘調査」以上すべて『和歌山平野における荘園遺跡の復元研究』海津代表・JSPS 科研費1552403 2006に所収)。

⑭湯川家文書、「永禄五年七月日湯川直春起請文」(『和歌山県史』中世史料二、「湯河家文書(東京都)」26号。現在レプリカが和歌山県立わかやま歴史館<一番丁3番地>に常設展示されている)。註8 石田1977論文が惣国一揆史料として注目した。

⑮註10川端論文、註8 石田2010論文

⑯雑賀五組の「十ヶ郷」「中郷」組をのぞく3組であり、当事者である岩橋荘・和佐荘の属する「中郷」は惣国の惣衆から除かれたのであろう。論争になっている惣国の範囲、指導層の身分階層等についてはここでは考察の対象としない。

⑰海津一朗編『中世都市根来寺と紀州惣国一揆』同成社、2013

⑱この事件に泉識坊勢力が干渉した要因としては、山東荘に本拠を持つ根来寺勢力の影響、紀ノ川右岸の土橋氏領河川敷支配との関わり、雑賀五組「杜家郷」「南郷」組との連携などが論理的に想定されるだろう。

⑲坂本亮太氏の校訂本が註17前掲書に所収。解題もおなじ。史料批判を要する重要史料なので、本稿の論旨に直接かわらない中略部分も、全文を引用しておく。

中略A 佐武伊賀ら若衆(土橋軍)の栗村留守番の様子と鉄砲音(開戦)を聞き船で渡河して戦場中ノ島に向かう様子

「我等ワカキモノニテ候へハ、方々之人数ノホリ、サシ物ニテ寄候ノ間、土橋ニ延福寺ト申寺ノ屋ネヘ上リ、見物申候処、鉄砲ツ、ケテ式ツ三ツナリ申候間、ヤネヨリトビヲリ、舟本ヲサシテ参候処、手ヲヒハシバシ河ムカヒヘ参候間、其俣舟ニ乗ムカヒヘワタリ越、」

中略B 撃破した平内次郎らの岩橋軍を乱捕りする様子、戦鬪の推移

「敵申やウハ、此分ニテハカ、ヘ候事ナル間敷候間、道場ヘツボミ候ヘト申候カ、タシカニ聞申間、其俣我等カ、リ申候敵ノ構ヲトヒ越、アトヲ見候へハ、タ、ミノ下ヨリ平内次郎ヲ引出シ、クビヲ取申候間、タチカヘリ甲ヲトリ、相ウチト申捨候間、」

⑳平次・太郎左衛門は、永禄5年の湯川直春起請文(註14)に

て、「雑賀」組の土橋の代表として併記されている。土橋は栗村に比定されるが、鈴木の子孫一とらび姓で記された例外的な存在(両名の併記は唯一)。比定される雑賀五組の最有力者である。

㉑武内雅人「おいなる共和国的存在—根来・雑賀惣国へのいざない」海津編『中世根来の社会史』科研報告書18520496、2008、同『『佐武伊賀勘書』史料解題の改定及び補遺』『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』32、2011、同「佐武伊賀勘書から読み取る根来寺行人らの世界」(註17書所収)

㉒紙数の都合上言及できないが、近郷合力の私合戦と、惣国一揆(根来・雑賀五組など)の「平和団体」との差は、軍事力の発動に対する補償の在り方の違いに現れるはずである。つまり、根来・雑賀の扱いが惣国の軍事力による成敗とすれば、武器調達と消耗補償はどのように行われているのか。史料2を見るかぎり、武具の使用と管理(道具揃え)は各村落に委ねられている。また恩賞沙汰については「相ウチ」の宣言など強い執着と腐心をしている(敵平内次郎の射殺者特定)。鉄砲名人、射撃手の技を誇らしげに語るのは単なる軍記の武勇伝ではない。鉄砲が戦鬪の中心になった時代の戦功確認に対する技法であろう(勘書という史料自体の機能)。惣衆の軍事奉公に対して、惣国一揆サイドが新たな恩賞システムを担保できたかが問われる。従来自力の村のように、村落任せのままで惣国一揆が機能不全になるのは明らかだろう。この点には言及する手だてがなかった。

㉓藤本久志『中世民衆の世界—村の生活と掟』岩波新書、2010

㉔註8 石田1977・2010論文参照

㉕惣国が「内輪散々」=内紛によって滅亡したという観察は、本願寺坊官の『貝塚御座所日記』天正13年3月24日条。原刀狩令については播磨良紀「雑賀惣国と織豊政権の戦い」『和歌山地方史研究』46、2003、海津編『中世終焉—秀吉の太田城水攻め—』清文堂。惣国内紛と紀ノ川河道変更(五組枠組みの変化)には強い因果関係があると考ええる。

<補注>

註7のように研究史上で惣国惣衆が注目されるのは1980年代初頭である。が、私は東京学芸大学の佐藤和彦氏の自主ゼミ「中世ゼミ」において、1年上級の田村治久氏がこの史料に特別の注目をして、紀州惣国の農村問題として卒業論文を書いたに記憶している。具体的なことは全て失念したが、「紀州自治・中人制・「惣衆」はすごい」とくりかえし喧伝されていたことは忘れられない(この件について、職場を紹介してくれた先輩の石田晴男氏に議論して、「惣国研究には枝葉の問題である」といなされた記憶がある。いま改めて、中世自力社会の本質に根ざす挙証として取り上げたゆえに私事ながら一言付記しておくことを許されたい)。